

# 京都部落問題 研究資料センター通信

第15号

発行日 2009年4月25日（年4回発行） 編集・発行 京都部落問題研究資料センター

## 2009年度部落史出張講座 地元で学ぶ地元の歴史

本年度は下記のとおり、千本地区に関わる歴史についての講座を開催します。ふるってご参加ください。参加希望の方は、当資料センターまで電話・FAX・電子メールでご連絡ください。

- 第1回 5月29日（金） 「近世 蓮台野村の歴史 甚右衛門から元右衛門」  
辻 ミチ子さん（元京都文化短期大学）
- 第2回 6月12日（金） 「歴史家益井信の生涯」  
小林 丈広さん（京都市歴史資料館）
- 第3回 6月26日（金） 「全国水平社中央執行委員長・南梅吉」  
朝治 武さん（大阪人権博物館）

時 間：午後6時30分～8時30分

場 所：楽只コミュニティセンター集会室

京都市北区紫野北花ノ坊町18 市バス「千本北大路」バス停下車すぐ

交通案内

地下鉄北大路駅・北大路バスターミナルから約10分。

<市バス 1, 101, 102, 204, 205, 206, 北8, M1>

地下鉄・JR二条駅から約15分。阪急大宮駅から約20分。

<市バス 6, 46, 206>

京阪出町柳駅から約20分。 <市バス 1, 102>

JR京都駅から約40分 <市バス 101, 205, 206>

参加費：無料

協 力：NPO法人くらしネット21

佛教大学人権サークル かけ橋

## 本の紹介

栗原美和子著

## 『太郎が恋をする頃までには』

伊藤悦子

京都教育大学教員

紹介するにあたって

京都部落問題研究資料センター事務局から『通信』に本の紹介をしてほしいと頼まれたのは、確か二月だったと思う。事務局からは「ちよつと紹介の難しい本だと思うけど、部落問題の業界ではほとんど黙殺されているから、是非紹介してほしい」とのことだった。センターにはお世話になってるので、頼まれたらできることは断つてはいけない。それに、二〇〇八年一〇月に発行された直後、「猿回し芸人の村崎太郎と元テレビプロデューサー栗原美和子の部落差別との闘い」などと、新聞に大きく宣伝されていたのに、ちゃんと読めていなかったたので気になってきた。そこで、二つ返事で紹介文を書くことをお引き受けしたのである。ただし、本の概要は私の大学の授業（人権教育論）のなかで学生に書かせている「おすすめしま

すこの一冊」というレポートで学生が取り上げていたので、ある程度の内容は把握していた。そんなこんなで、軽い気持ちで引き受け

た。しかし、読み終わったものの紹介が難しい。なぜ、紹介が難しくなったかというところ、確かに力作だけれど、「いつの時代の話？」と思ってしまうためである。「うくん」とうなつてしまったというのが、一番の感想である。

部落問題とりわけ結婚差別の問題についての当事者の本は、和田武広『はじけた家族 手記・結婚差別』（一九九五年、解放出版社）などがある。それらを読んだ時は、ノンフィクションという手法をとっているもので、これほどまでに結婚差別が厳しい場合もあるのかという事実を知ることができたし、それらに真つ向から闘う人々に共感しながら読み進めることもできた。一方で、そうした結婚差別が一〇

人中一〇人に起こることでは無くなってきているということも、奥田均『結婚差別』（二〇〇七年、部落解放・人権研究所）が実態調査を踏まえて分析しているし、『インタビュー「部落出身」』（二〇〇三年、解放出版社）からも学んできた。それに何より、先日自分たちが著した『被差別部落の大学卒業者の進路と結婚』でも、考えてきたことである。結婚差別は無くなつてはいないが、解消に向かいつつある。部落の人間にとつて「部落の出身」は自分を規定する一部ではあるが、全てではない。結婚に際して部落出身を語るのには「差別されるかどうかにおののいて」語るのではなく、相手の思想性を問う試金石であるという結論を描いていた。

そうした部落問題の現状認識からして、この『太郎が恋をする頃までには』は内容的には違和感があり続けた。

他者がどんな感想を持ったかが気になつたので、事務局から紹介文もお借りした。全国各地域人権運動総連合の機関紙に掲載された、愛知人権連・甚目寺支部長丹波真理さんの「歴史の歯車は止められない 『太郎』とかかわつて（上）・（下）」（「地域と人権」

一〇七一号・一〇七二号、二〇〇八年二月五日・二〇〇九年一月五日）の記事、土肥いつきさんのブログのコメント、それと「アエラ」（二〇〇八年一月三日号）の記事「歴史とたたかう結婚」などである。このうち、アエラの記事がこの本の紹介と作者の意図が書かれているので参考になつたが、作者の意図と本の内容がずれているのではないかという感想が新たに生まれもした。

そして、もうひとつの違和感。なにより恋愛小説という形態を取っているために、なにかしら重要な示唆や表現があるのだが、「地味でダサク」生きてきた研究者の私には、テレビ業界で活躍する作者の感性と合わないためか、表現が受け入れられない。「いや、これは表現として陳腐だろう」と思う部分に何度か出くわした。もっとも生まれてこのかた恋愛小説は読んだことがないという事実が気づいたりもしたので、本のなかの表現に対して「恥ずかしい」と思うのは私個人の側の問題かもしれない。ともあれ、まずは本の紹介をして、カミングアウト・アイデンティティと当事者性について、私が考えさせられたことを述べていきたいと思う。

## 話の展開

本の紹介をする時に、最後のおちまで言っではいけないと、康玲子「わたしには浅田先生がいた」の紹介をした時に論されたので、それに気をつけて紹介したい。

この本は、亜細亜テレビのキャスターを務めた後、亜細亜新聞の記者になっていた五十嵐今日子が「本当の私を描きたい」という思いで書いたという挨拶文から始まっている私小説である。プロローグで、二〇〇七年五月に五十嵐今日子が海地ハジメと結婚したこと、それはバブルの申し子である五十嵐今日子が離婚歴のある大道芸人と結婚することになったという事実を示し、その結婚にいたる道筋が時系列で示されていくという出だしになっている。

出合いは五十嵐今日子が新しい企画「波瀾万上」の第一話に一世を風靡した猿まわし芸人の海地ハジメを取材することから始まる。取材中、五十嵐今日子は「土臭くて、泥臭くて、男臭い」海地が生理的に苦手であるという印象をもつ。海地の方もどちらかというところと挑戦的な雰囲気であったが、取材後海地の方から飲みに来ないかと誘い、いきなりプロポーズするの

である。

そうした真逆な二人がどのようなひかれあつたかというところは、ちと説明も難しいので本に譲る。要は仕事に生きてきて四二歳になつた五十嵐今日子とは不倫関係で孤独をなめていたところに、海地ハジメが訪れたということであろう。

この本の一つの山場が、第三章「二〇〇七年三月十五日の長い夜」である。つきあい始めていた今日子に海地ハジメが自分史を語る。海地ハジメは片田舎の人口五万人の小きな町で生まれた。小学校にあがる頃には、家が貧乏であることも差別を受けていることも自覚して、父親からは自分の出自を説明されていた。つまり、海地は五十嵐今日子に自分が被差別部落出身であることをカミングアウトするのである。「哀しい目をして」。この表現はこの小説のキイワードである。それを受けとめた五十嵐今日子の脳裏には島崎藤村の『破戒』がよぎる。

しかし、海地の父親は部落解放のために立ち上がる。部落解放要求運動の請願行進に妻と幼いハジメも参加し、そこで部落の仲間が「タローが恋をする頃までにはこの壁ぶちやぶつて必ず差別のない世の中に」という詩を謳うのであ

る。そしてハジメは本名が太郎であること、一九六〇年代の部落の仲間が自分に向けた思いを明かす。父親が国会請願運動をし市会議員として活躍するとともに、息子の海地ハジメも小学生で既に学業放棄状態であつたのに、五年生になつて長距離走でがんばることを覚え、県内で一番の進学校に入学する。高校三年で進路に悩んでい

たとき、父親から「猿まわしになれ」「なんでもいいからトップになれ、男は闘うために生まれてきた」と言われる。海地ハジメの父が長く途絶えていた猿まわしの芸を復活させていたのを継ぐことになる。

父は「我々の歴史を葬つてはいかん…(中略)堂々と自分のルーツを名乗れる、語れる、そういう日に向かつて突き進んでいくべきなんじゃ」「お前というスターが生まれることによって、被差別部落に対する偏見を失くしていくんだ」と。そして、約束どおりスターになつたものの、父のようにカミングアウトもできず、地元をすてたというのである。

五十嵐今日子はこの闘うという姿勢とその挫折に自分を投影して、結婚を承諾する。

人はそれぞれの生まれた家族に、結婚の報告に行く。海地ハジメにとっては母親、地元との和解の旅であり、五十嵐今日子にとっては海地ハジメを紹介する、被差別部落出身であることを告げる旅である。今日子は「打ち明けること自体がナンセンス」という態度で、結局は打ち明けない。

しかし、今日子の実家から帰ってきた時、海地ハジメは「本気でおれと結婚する気があるのか」と切れて叫び出すのである。それは両親にハジメの生い立ちを隠したことへの非難である。そして、結局、婚姻届けを出した後の結婚披露パーティーの前に打ち明けることになる。今日子の父親は元警察官、正義感もあり娘を応援してくれている。母親はそうした父親を信頼しきつて生きてきた専業主婦。打ち明けた結果、父親は「パパにとつては、なんの問題もない」となるが、母親は「絶対にイヤです」「そんなこと絶対に世間に知られたくない」という反応になる。もちろん、五十嵐今日子は母親を説得するが、とにかく公表するな、親子の縁を切ると物別れになる。その後、仕方が無く東京に帰ってきた今日子に母親が倒れたという知らせが入り、披露宴を延期に

することになる。海地ハジメは「延期ではなく中止にする」そして「離婚しよう」ということを提案するのである。理由は一緒にいると傷つけあいが続くからと説明するとともに、ハジメは「この結婚は、あなたが両親に秘密にした時点で成立していなかったんだ」というのである。ハジメは結婚する前にそれをはっきりさせたかったが、幸せを逃すことになるのが怖くて、言わなかったのである。

それを聞いた今日子は「じゃあ、私にどうしろと言っただ……。(中略)渦中の人になってしまった以上は、当事者と同じ気持ちを感じて覚悟だっただけでいていい!でも、でも!渦中の人にはなり得ても当事者にはなれっこないのだ!」と心の中で叫んでいる。

後は、本を読んでください。この本を五十嵐今日子が書いた理由がわかります。

カミングアウト・アイデンティティ  
この本をなぜ私小説風にしたいのだろうと思う。主人公の海地ハジメが村崎太郎で、五十嵐今日子が栗原美和子であることは本の表紙でわかることである。また、村崎太郎の父親が村崎義正であり、著書『猿まわし復活』(部落問題研究

所、一九八〇年)や『歩け!とべ!三平』(筑摩書房、一九八二年)のなかで、部落出身であることをカミングアウトしていること、廃れていた猿回しの芸を復活させた人物であり、全国部落解放運動連合会の中央委員、山口県連の活動家であり、市会議員であったことは、我々業界関係者にとっては自明の事実である。したがって、村崎太郎が被差別部落出身であることも自明だった。いまさら、カミングアウトもされない。ただ、広く「一般大衆」と呼ばれるような層が知っていた訳ではないことも確かである。

しかも、アエラの記事によると、二人は離婚していいのに、物語は村崎のたつての願いで離婚になっているという。「いろいろあったけど、ハッピーエンド」ではいけなかったというらしい。

被差別部落出身ということと告げることが、四〇代後半、あるいは五〇代より上の人にとって簡単ではないことは、私も知っている。言う必要があるかないか、どのタイミングでいうか、いつも気になるといふ点も知っている。そして、カミングアウトした後の相手の反応を、あるいはされた側のぎこちなさも。そして、東京に住んでいる、あるいは実際に存在している

部落から離れて暮らしている若い被差別部落出身者にとっても、カミングアウトが重いことも知っている。一方で、私の人権教育論でグループ学習をするとき、「あ、俺、今話題にしている部落出身やねん」と、他の大学生が目を見て話しているなかで、かるゝゝく語る姿も見てきた。

部落出身ということと語ることは是非、必要性の度合い、どのよ様な表情でどういう語りをするか、それぞれのスタンスになりつつある。みんなが「哀しい」目で語るわけではない。

つまりは部落出身者にとつてのアイデンティティが多様化している、全部ではなく、自分の一部であり、その重さは人によってかなり違うといふことである。したがって、この本の主人公のように、カミングアウトが実存をかけた重いものである人もいて、海地ハジメが二一世紀の今日もいることはわかる。しかし、部落出身者の全てではない。

その意味で、この本の最大の問題は海地ハジメ以外の部落出身者のアイデンティティが描かれなかったことだろう。実在する村崎太郎さんの真摯な葛藤を否定することはできない。しかし、やしきたか

じんのTV番組などによると、村崎さんは「僕はB型で、男で、部落出身です」といえるような状態にしたいと語っている。カミングアウトを軽くできる社会、故郷の歴史的位置が違っててもそれはいいじゃないか(外国籍の人が、みんな違っていいというようなレベル)と言えるような社会を願って、この時期に大々的にカミングアウトをしたという村崎・栗原夫妻の思いと、この本の描いているカミングアウトの違いをどう解釈したらいいのか、私にはわからなかった。

部落問題をだれも真剣に考えなくなっているのではないかという焦りのなかで、描かれたというのなら、少しは理解できる。だが、カミングアウトについて描いている金城一紀の『GO』の軽快さ、葛藤の奥深さに比べると、もう少しがんばってほしいなと思う。

もうひとつの論点としては、部落問題の当事者性がある。

この本が「陳腐な表現」になつてしまう最大の問題は、上に述べた村崎さんの葛藤やアイデンティティを対象化しきれないまま、描いてしまったことだろう。栗原こと五十嵐今日子は最後に「当事者にはなれない」と叫んでいる。わかるう、近づこうとしたが結局は

わからないということでは本は結末に進む。

部落問題の当事者とは部落出身の人間なのだろうか？紋切り型に言えば一九六五年の同和对策審議会答申では部落問題は「国民的課題」だと言っている。そもそも、差別・被差別の関係性は、両者にとつての問題である。差別の結果としての実態的課題はさておき、結婚という究極の関係性における部落問題は、両方から乗り越えるものであって、血に流れている「哀しみ」などといわれると、それは一九七〇年代の二〇代の私にはついていけないが、いい年になつた二一世紀の私はしらけてしまうのである。部落問題の当事者は、角岡伸彦さんの言葉を借りれば「部落問題関係者」みんななのである。当事者性を語ってしまったのは、対話はなりたたない。ただし、部落問題関係者のなかにも、状況によって権力関係が生まれることがあるから、全く対等な当事者であるともいえないのはもちろんである。

学生にすすめられるか？（自問自答）  
最初に、この本は私の授業のレポート「おすすめます」の一冊」で取り上げられていたことは述べ

た。部落問題についての本は、在日朝鮮人に関わる本、とりわけ「在日文学」といわれるほどの厚い層をなしている状況に比べると、驚くほど少ない。いまだに、『破戒』と『橋のない川』である。もちろん、屠場労働について描いている佐川光晴『生活の設計』などは、私個人は佳作だと思つているが、中上健次以外にメジャーな方をあまり知らない。

そういう意味では、学生に部落問題を描いている「最近の」小説ということでは、すすめることもできる。是非読みなさいではなく、読んでみたら、である。タレント性が高い村崎太郎さんの半生と結婚差別に関わる本で、学生には部落差別の現存を少しは実感させることができるからである。しかし、結婚差別の厳しさを言うことは、一昔前なら若者を奮い立たせることになつたと思つたが、今は「そんなしんどいなら、やつぱりかかわらんとこう」になりかねない。そういう意味で村崎・栗原夫妻が意図した部落解放の思いと、この本が果たすであろう役割が一緒になつていない点が残念である。

（幻冬舎刊、二〇〇八年、一五七五円）

本の紹介

水内俊雄・加藤政洋 大城直樹著

『モダン都市の系譜』

地図から読み解く社会と空間

杉本 弘幸

（京都市市政史編纂助手）

本書のキャッチフレーズは「都市空間を構築する権力の諸相を、地図と風景の中に読む。都市を生産する政治、経済、権力の作用、そこから生み出されるさまざまな社会問題の痕跡を、歴史都市・京阪神を舞台に解読する」というものである。都市を対象とした地理学の第一線の研究者三人が描いた都市空間をめぐる入門書である。以下、目次を示す。

- 序章 地と図の往還
- 第一部 近代都市空間の成立
  - 第1章 前近代都市・城下町
    - 【特論1A】都市周縁の近代墓地・花街・悪所
  - 第2章 城下町の明治 近代都市への変貌
    - 【特論2A】神戸市の土地利用調整と市街地の建設
  - 第3章 三都のインナーリング 都市計画の暗黒時代と言われるなかで
- 第二部 モダン都市
  - 【特論3A】横溝正史の描く神戸のインナーシティ
  - 第4章 郊外の誕生とその発展
    - 【特論4A】地方都市和歌山の郊外化・観光地化
    - 【特論4B】阪神間の邸宅街
  - 第5章 都市計画と社会政策の時代
    - 【特論5A】大阪の新興地の風景
    - 【特論5B】神戸の新興地の風景
  - 第6章 モダン都市の賑わい 盛り場化する商店街
    - 【特論6A】生活空間としての路地 宇野浩二の「十軒路地」再訪より
    - 【特論6B】新世界からジャンジャン横丁、そして飛田へ
- 第三部 戦災と復興
  - 第7章 戦時の都市建設 意図せざる近代化
    - 【特論7A】阪神大水害

第8章 建物疎開・空襲・戦災復興

【特論8A】花街から赤線へ

第9章 高度成長と現代の都市空間  
第9章 バラック/スラムと住宅要求運動

【特論9A】沖縄出身者の生活世界の变遷

【特論9B】猪飼野・アパッチ部落 昭和30年代の在日の生活空間

第10章 スプロール・団地/インナーシティ問題  
【特論10A】釜ヶ崎、あいりん地域

【特論10B】同和地区の変容  
【特論10C】民族からエスニックへ

第11章 大都市の光と影

以上の叙述は全て三人のそれぞれ持ち寄った草稿を元に討議を重ね、共同で改訂を加え、加筆を行うというスタイルをとっているため、各章や特論は全て三人の共同作業であるという。徹底した共同作業で形作られた書であるといえよう。本書は大学での授業のテキストとして作られたということもあり、非常に平易な叙述がその特徴としてあげられるだろう。

さて、本書では関西圏としての京都、大阪、神戸がその分析対象になる。歴史的な都心の周辺部、

すなわち「インナーリング」を中心としており、これらは「都市計画の暗黒時代」に形成された市街地である。そして、関西圏の特徴として、「インナーリング」からの都市論を発信するという意図も込められている。

例えば大阪では明治末から大正時代にかけて、これらの「インナーリング」と称される地域に零細な工場群が集積した。そして工場労働者達の住宅地や歓楽街が出現する。その外側で計画的な土地利用が進展した結果、無秩序な市街地が同心円状に取り残された。つまり、JR大阪環状線に沿って、工場地帯、密集した長屋地区、沖縄や朝鮮半島から来住した人々の定住地、日雇労働者の居住地などが「インナーシティ」として連鎖しつつ、存在していたのである。

まず、序章をみると彼ら自身の「地理学」というディシプリン(専門分野)への一種のこだわりが見取れる。あくまで学際的な視点にたちながら、あえて「読図」という地理学独特の手法を提示している。そのことを意識しつつも著者たちは、都市で「生存」することの厳しさを読者に示し、深刻な都市問題について真剣に考える素材を提示しようとしている。

地理学者である著者たちはこれらの地域を「文化的にも経済・社

会的にも都市問題の孵化器」とみなししている。そしてホームレスや様々な社会的マイノリティの問題に代表される今日まで積み残された様々な社会問題に触れている。また、都市の光と影の部分を表現しようとする一連の地図を用意して、都市の華やかさの背後に潜む都市問題を地図を通じて読みとることを提示する。図版も多く、本書を持つて街に出ていけば、これまでと全く違った目で様々な都市をみるこ

とができるようになるだろう。歴史都市といわれる京都・大阪・神戸をさらに深い視点で歩くことができるのである。

従来、地図を利用することはあつても、単なる道案内としてしか使ったことのないほとんどの人々にとつて、地図や写真などのビジュアル的な史料からこれほど多くの歴史的、社会的、文化的、経済的な様々な事象がはつきりと読み取れるというところに新たな目を開かれるだろう。そして、実際に現地をフィールドワークすることによって、現実のフィールドが持つリアリティを感じる事ができるのである。

本書で、都市を語る視点として選びとられるのは、工場労働者、「俸給生活者」「サラリーマン」といった「ふつうの人々」の視点であり、そのほか、日雇労働者、在日朝鮮人、被差別部落民、沖縄出

身者などの社会的マイノリティの視点である。そうした、抑圧されるものからの都市をめぐる言説を、様々な権力側の言説とすり合わせていくことで、本書は権力と抵抗のせめぎあいを作り上げてきた近代都市の具体的な姿を、いきいきと動態的に描き出している。

さらに本書は明治維新から戦後にいたるまでの関西圏のインナーシティをめぐる近代都市史研究総体を対象とした、現在のところ、最新の入門書であり、概説書である。残念ながら歴史学の側からはいまだこのような最先端の近代都市史研究の成果を提示した入門書や概説書の類はいまだ出ていないのである。それが地理学者の手で出版されたという意味を考えるべきだろう。

本書が示した今後の課題は大きい。従来、被差別部落史や在日朝鮮人史、社会政策史や社会福祉史研究の「分野史」ごとに研究が行なわれた研究動向を打破するため、それら複合的な「都市下層社会」に対する政策的対応を統一した視点で論じる必要が、現在の研究状況ではある。これまで被差別部落史研究や、在日朝鮮人史研究は、社会的マイノリティの歴史的な研究の中でも多くの研究成果を挙げてきた。「貧困層」や「労働者」を対象とした社会政策・社会福祉

史研究も、重厚な蓄積をもっている。

しかし、これらの複合的な「都市下層社会」の形成と構造をめぐる力学は、互いに複雑に絡み合っており、より大きな枠組みの中で実証的研究を進めなければ研究の発展もないのである（拙稿「日本近代都市社会政策と「下層社会」研究の再構成」、『新しい歴史学のために』二五六号、一一 五年）。本書は多様な地図や写真などを駆使した空間論的な視角から、このような研究課題にもあらためて気づかせてくれる。

これまで本書でも示されたような社会的マイノリティの様々な都市政治への参加の実態について明らかにした研究は、被差別部落については重松正史「大正デモクラシーの研究」（清文堂出版、二二年）、在日朝鮮人に関しては松田利彦『戦前期の在日朝鮮人と参政権』（明石書店、一九九五年）、外村大『在日朝鮮人社会の歴史学的研究』（緑蔭書房、二四年）などが存在するが、戦前から戦後までを連続した視角で分析を行う研究はほとんどない状況である。そこで、都市社会行政・都市政治・都市社会構造の実証分析の上に立ち、大胆に各都市間や都市問題の現れ方の相互比較を行い、共通点と相違点を明らかにし、戦後から高度経

済成長期を通観して分析することが必要である。特に、ほとんど研究蓄積のない戦時期から、高度経済成長期にかけての現代都市と社会的マイノリティの関係構造分析を行うことが重要であろう。本書には地理学の立場から戦後の問題についても大きく触れられており、そのヒントを与えてくれる。

近年の研究成果では、源川真希『近現代日本の地域政治構造』（日本経済評論社、二一年）、大門正克・森武磨編『地域における戦時と戦後』（日本経済評論社、一九九六年）にみるように地域の実態に即しながら戦前期、戦時期、占領改革期、高度経済成長期のそれぞれの画期を踏まえた上で現代都市と社会的マイノリティの関係構造のあり方と変容を明らかにする必要があるだろう。

そして、京都の事例も本書で重要な位置を占めている。第一に、京都市では工業化が進んでいくが基本的に西陣織などの伝統産業を中心とした染色業や生活用品を製造する軽工業が中心産業であった。そして、製造業の大部分は零細企業であった。また日本の近代都市の大多数は、近世の城下町や宿場の系譜を引く「伝統都市」であり、京都はその代表的な存在である。京都市の事例を分析することは、他の多くの近代都市との関係

において、重要な意味がある。

第二に近代都市京都には、「古京都」・「国際文化観光都市京都」などの言説が隠蔽するもの／＼のこされるものがあつた（高木博志『近代天皇制と古都』、岩波書店、二六年）。常に京都には、強固な自治の主体と排除されるマイノリティが存在していた。このような都市構造を描き出したのが、辻三子（『転生の都市京都』、阿吽社、一九九九年、など）、小林丈広（『近代日本と公衆衛生』、雄山閣出版、二一年、など）の歴史叙述である。

また京都は部落問題研究所や京都部落史研究所などにより、長年にわたり部落問題関係史料が豊富に発掘され、研究目的なら誰でも利用が可能な環境と、実証的な多くの研究蓄積がある稀有な地域でもある。また在日朝鮮人研究の分野においても世界人権問題研究センターにより資料集などが作られつつあり、これも多くの研究蓄積を持つている。

第三に京都市では、不良住宅地区の問題が被差別部落の問題と密接に関わっている。一九二〇年代後半以降は、朝鮮人の流入が全市域で本格化し、不良住宅地区・被差別部落・在日朝鮮人という複合的な都市下層社会と、現在に至るまでの都市社会政策の関係を問うための格好のフィールドなのであ

る。このように近代京都というフィールドは社会的マイノリティ研究においても拠点となる条件を備えていることが本書でも提示されている。

しかし、本書にも問題がないわけではない。本書は非常に読みやすいが、参照されている文献は最小限に抑えられ、本文中に組み込まれているだけで文献表がないのは惜しまれる。初学者がさらに発展的に学習や研究を続けるきっかけとしても参考文献を一括してあげる配慮が必要であつたらう。

また、地図も多用されているのだが、地図以外に空中写真や風景写真も多い。「読図」の重要性を解くわりには、地図を読み解いている場面はあまりにも少なく、むしろ写真や文字資料などを駆使して復元するための一つの資料として地図は位置しているにすぎないように思える。そして、地図や図版もあまり精度がよくなく、判読できない部分が多い。もっと本の版を大きくするか、地図をスキャナーで読み取るときの精度を上げる必要があつたらう。

だが、本書は近代都市史研究に関する極めて良質な入門書であり、概説書である。ぜひ、本書を手に新たな視点から都市探訪に行かれることをお勧めする。

（ナカニシヤ出版、二八年、二九四〇円）

本の紹介

トニー・ロビンソン&デイヴィッド・ウィルクック著  
 図説 『最悪』の仕事の歴史

田中啓輔

(元大阪府立芥川高校教諭)

本書は英国のテレビ番組から生れたものである。訳者あとがきによると、著者トニー・ロビンソンは英国では著名な俳優とのことである。特にテレビの体験番組で人気を博した。共著者デイヴィッド・ウィルクックはロビンソンと共に番組を手がけたプロデューサーである。考古学に取材した『タイム・チーム』というシリーズに続く、『ザ・ワースト・ジョブズ・イン・ヒストリー』と名づけられた番組シリーズで、ロビンソンは歴史上の最悪の仕事をしたどり、実際に体験して見せる。番組は時代を追って編成された第一シリーズと環境(都市部、王室、産業界、海上、田園地域)ごとに編成された第二シリーズが放映された(二〇〇四年、二〇〇六年)。本書はその第一シリーズに基づき二〇〇四年に刊行された。ロビンソンはもとも歴史や考古学に造詣が深く、この著書の他にも、子ども向けの歴史案内書

十数冊書いているという。子どもの本を多く手がけた著者らしく、語り口は平易である。英国史における様々な最悪の仕事を追跡することにより、歴史が、教科書に書かれる戦史や王朝の交代劇だけでなく、名もない人々の労働によって支えられていることを、読者に訴えかける。

私たちは、博物館に行き王族たちの残した金銀財宝を鑑賞し、古の栄華に思いを馳せる。しかし、ロビンソンは、例えばローマ帝国の時代の繁栄を語る金のティアラを見る事で、ブリタニアの金鉱夫の過酷な仕事へと思いを馳せるように読者を促す。華麗に語られる中世騎士物語の実相を証し、主人の汗や糞尿に塗れた武器甲冑の手入れをする武器甲冑従者の仕事を紹介する。またロンドンの町に今も聳え立つセント・ポール大聖堂の、百メートルを超えるドームの丸天井に壁画を画く仕事がいかに

至難の技であったかを、具体的な作業工程の叙述によって示す。

かつて、英国人歴史家アイリーン・パウアは『中世に生きる人々』(一九二四年)の中で「歴史家も一般の人もおもに政治と制度の歴史すなわち政治的な諸事件・戦争・王朝・あるいは政治的の制度やその

発達に興味をもっていた。したがって歴史は事実上、支配階層に関するものであった。」歴史家は目立たない大多数の人々の生活や働きを調べようとしなかったのである。けれどもこのような人々が骨を折ってこつこつと働くところにこそ、この世の繁栄が築かれ、これらの人々の隠れた礎石として、

はじめて歴史家の賞讃する有名人は政治や制度という大殿堂を建立し得たのである。」(三好洋子訳)と言っている。またイタリアの歴史家カルロ・ギンズブルグは名著『チーズとうじ虫 一六世紀の粉挽屋の世界像』(一九七六年)の中で、プレヒトの詩「労働者の読者の問い」の中の一節「あの七つの門をもつテーベの都市を建設したのはだれですか」という問いを引用し、「歴史の資料はこれら名もない石工たちについてはなにも語っていない。けれどもこの問いは依然としてその重さを保ちつづけている。」(杉山光信訳)と言っ

ている。本書『図説「最悪」の仕事の歴史』はこのような社会史分野の研究の成果を、一般読者向けに分りやすく紹介するものであると言えるであろう。

本書の編成は、時代を追って以下の通りである。

- 第一章 最初の最悪の仕事
- 第二章 中世の最悪の仕事
- 第三章 チューダー王朝時代の最悪の仕事
- 第四章 スチュアート王朝時代の最悪の仕事
- 第五章 ジョージ王朝時代の最悪の仕事
- 第六章 ヴィクトリア時代の最悪の仕事

各章末には、著者独自の視点からする、それぞれの時代の年表が配置されている。

全篇を通じて紹介される最悪の仕事は六十五業種である。それらが、時代を追ってリレーのように語り継がれる。一話の終りには、必ず次の仕事に労働現場を訪問する仕組みになっていて、その巧みな話術で読者を引き付ける。学術的な社会史の本の枠を越えた、わくわくするような読み物にしたいという著者の意図は面目躍如たるものがある。文中絵画や写真の図



版も豊富である。

ところで、著者はどのような基準でこれら最悪の仕事を選び出したのであろう。ロビンソンは冒頭、人の悲惨さを客観的に測る方法がないので、主観に基づいて選定したと断っている。しかし、最終章ですべてを総括する形で、最悪の仕事を選定する五つの要素を挙げている。第一番目は、なみなみならぬ体力を要求すること。二番目は、汚れ仕事であること。三番目は低収入であること。四番目は危険であること。最後は、単調な繰り返し仕事であるということである。今日的な言い方であれば、「きつい」「きたない」「危険」の3Kに「低収入」「退屈」の2Tを加えたものということになる。最悪の仕事はこれらの要素が複合的に絡まり合っているのである。

第一の要素の顕著な仕事は、アングロ・サクソン時代の耕作人<sup>フアラウマン</sup>。農耕器具の発達する以前の農民の生活は洋の東西を問わず厳しいものである。著者は読者の興味をそそる反吐収集人、武器甲冑従者ヒキガエル喰いなどという特異な仕事を紹介しながらも、社会の根幹をなす耕作人を登場させることを忘れない。スチュアート王朝時代のセダン・チェア担ぎは、上流

人の遊興のための、いわばタクシ業のようなもので、天蓋つきの座席を二人一組で肩に担いだ。超人的な体力を要求され悪天候にも耐えねばならなかった。また、体力を要する仕事の代表的なものに、ヴィクトリア時代のナヴィの仕事があった。ヴィクトリア女王の時代には鉄道の敷設が盛んに行われたが、この仕事に従事したのがナヴィと呼ばれた工夫たちである。十九世紀の中ごろ、英国には二五万人のナヴィがいたという。彼らの出身地は、ランカスター、ヨークシャー、スコットランド、それに一八四五年から四八年にかけてのジャガイモ飢饉で大挙して英国に渡ったアイルランド移民たちであった。

二番目の要素と三番目の要素については少し詳しく見ていきたいので後に回すとして、四番目の危険を伴う仕事には二種類ある。スチュアート王朝時代の爆破火具師やジョージ王朝時代の海軍の火薬小僧のように戦いのさなかに死ぬかもしれない危険と、チューダー王朝時代のおしろいに含まれる鉛に冒される少年役者やヴィクトリア時代の黄燐に下顎骨を冒されるマツチ工のように、知らぬ間にその職業に関係した病気に罹ってしまう危険である。

五番目の退屈さの代表選手は中世の財務府大記録の転記者であり、ジョージ王朝時代の貴族の田園趣味による造園の流行で、風景の一部として雇われた偽隠遁者であるだろう。しかし、それはほんの一例に過ぎないのであって、退屈さはほとんどすべての仕事に付き纏うといつてよい。

さて、第二番目の汚れ仕事であるが、著者はそれぞれの時代の最悪の仕事の中でも最悪の仕事に、この汚れ仕事に属する職種を選択している。

中世を代表する、縮絨職人<sup>しゆくじゆう</sup>。これは毛織物産業にぞくするものである。脂肪分の多い織り目の粗いざつくりとした初段階の毛織物の生地から脂肪などの不純物を取り除く縮絨という作業工程がある。アルカリ溶液に漬けて脂肪分を分解させるのだが、そのために尿が使われた。その溶液に浸した生地を七、八時間足で踏み続けるのである。縮絨職人の仕事は、体力も要り、悪臭と単調さにも耐えねばならない仕事であった。しかし、縮絨は、当時の主要産業の中心的な職業であり、十分な収入にはなつた。

チューダー王朝時代の最悪の仕事に位置付けられている、大青染め師の仕事も悪臭との戦いである。

チューダー朝のタペストリーや織物に今も残る濃い青色の影には、大青染め師の最悪の仕事があった。「青色の抽出過程でたいへんな悪臭が出るので、大青染め師は糞清掃人と同じように、社会に受け入れられない集団として、周縁部に生きるしかなかった。」実際には彼らは高度な化学的知識を持った職能集団であった。しかし世間とはうち解けず、同族婚が多かった。

本書の最後を締め括る、すべてに時代を通じての最悪の中の最悪の仕事に位置付けられているのが皮なめし人<sup>かわなめし</sup>である。この職種は実際はこの本のどの章でとりあげてもよいほど古くからあった。しかし、ヴィクトリア時代に革製品の需要が飛躍的に伸びたのである。この時代、英国ではほぼすべての町にひとつの皮なめし工場があったという。このように重要な産業であったが、縮絨職人、大青染め師同様に都市のほずれの地域に追いやられる職業の一つだった。社会からは差別されながら職能集団を形成し、同族婚を繰り返した。

第三番目の低収入の観点は、著者自らは、取り立てて前面に押し出して言うわけではないが、人権的見地から見ることも出来るであらう。著者の立脚点は本書文末におかれた「武器甲冑従者や火薬小

僧がいなければアジャンクールの戦いもトラファルガーの海戦もなかったろうし、糞清掃人がいなければハンプトン・コート宮殿もなかったろう。「私たちの歴史が作られてきたのは、それぞれの時代の「最悪の仕事」に従事した、無名の人たちのおかげなのである。彼らこそ、この世界を作ってきた人たちののだ」という言葉に尽くされている。本書は政治史、経済史、思想史にも職業差別の起源について触れられてはいない。それは著者の意図するところではない。しかし、本書を通じて各時代の倫理観の特性を見ることは可能である。低収入の仕事を行う人々は、社会の最下層に位置付けられる人々である。彼らが時代の偏見や差別に晒されたこともまた真実であろう。ローマ時代のコイン奴隷は無報酬で働かされていた。中世後期は大聖堂、城、修道院と建設ラッシュの時代といわれるが、建築現場で起重機を動かす踏み車漕ぎの仕事を担ったのは、地元に住んでいた目の不自由な人だったと言われている。一日中朝から晩まで、雨が降ろうと日が照ろうとせせせと足を動かし、それでももらえるのは、どうにか糊口を凌げる程度の賃金だった。また中世は医学も未発達で、ありとあらゆるい

かがわしい民間療法が行われ、その仕事に携わる賢女と呼ばれる者たちがいた。彼女たちはそれなりの役割を担ってきたが、時代が下るにつれて、魔術を行う者として異端審問にかけられるようになる。死刑執行人は必ずしも低収入に分類されるものではなかったが、社会的には忌み嫌われていた。一方で中世人は、公開処刑を一種のシヨールと見立てて憂さ晴らしをするような残酷さもあつた。他方、ロビンソンの取り上げるところではないが、A・L・バイアーの『浮浪者たちの世界 シェイクスピア時代の貧民問題』（一九八五年）によれば、中世中期までは貧困を理想とする傾向もあつたという。「聖フランシスは貧者は神聖であり、聖者は乞食として生きるべきだと説いた。」中世盛期は救貧院の行政として貧困者への慈善施設（癩病院、孤児院、養老院、巡礼者のための宿泊施設）が最もよく実施された時代であつたという。しかし一四、五世紀になると「世俗社会では、こうした貧困の思想は権威を失い、新しい種類の価値、つまり世俗の活動と成功を価値あるものとほめたたえるルネサンス人文主義の新たな価値観がとって代わつた。」（佐藤清隆訳）

一八世紀になり、時代は産業革

命を経験し、近代国家への歩みを始める。ロビンソンは「産業革命は、ひと握りの人間にとつては富と権力の源泉だったが、一般大衆にとつては、惨めな仕事を数多く生み出す元になった」と言う。産業革命は新しい貧困層を生み出すが、一方において啓蒙思想や人権思想も芽生えフランス革命や市民革命に影響を与える。

ヴィクトリア時代の貧困層については、ジャーナリスト、ヘンリー・メイヒューの『ロンドンの労働とロンドンの貧民』、チャールズ・ディケンズやコナン・ドイルの小説など文献は豊富である。

産業革命が生み出した最悪の仕事の一つとしてロビンソンは精紡機掃除人やマツチ工を挙げているが、総じて多くの工場労働者を生み出した。彼らは低賃金で一日最高一四時間という長時間、工場に縛り付けられた。また、ナヴィヤ、ロビンソンは取り上げていないが炭坑夫なども生み出していく。しかしそれらの雇用からも漏れた最貧民は子どもも含め小石拾い、煙突掃除人、ネズミ捕り師、モク拾い、お茶の葉集め、ダストマン、ボロ布拾い、骨拾い、どぶさらいなどでぎりぎりの生活を維持する。泥ひばりと呼ばれた下水道を通じてテムズ川に流れ込んだ泥の中から

ら金目の物を拾い出す少年がいる。彼らは貧民対策として生れた救貧院にだけは入りたくないのである。救貧院の実体はディケンズの『オリヴァー・ツイスト』などで描かれる、刑務所のような施設で、過酷な労働が課せられた。中世の貧民と違いヴィクトリア時代の貧民は危険な階級と見なされ救貧院に収容されたのである。カール・マルクスやエンゲルスが目にしたのはこのようなイギリス社会であつた。エンゲルスには『イギリスにおける労働者階級の状態』（一八四五年）の著書がある。やがてヨーロッパ各地で社会運動や革命運動が起こる。社会運動家アンニー・ベザントに指導されてマツチ工場の女工たちは立ち上がった。給料と労働条件の改善を求めてストライキを起こし、成功させた。彼女たちは労働者の権利に関するパイオニアであつた。

いつの時代にも、新たな最悪の仕事は生み出され、その仕事を担っていく人間は存在する。人類はいまだ貧困問題を解決しえないし、現代社会は労働者に新たなストレスを強いている。あらためて歴史とは何かを考えさせる本である。

（日暮雅通・林啓恵訳、原書房刊、二〇〇七年 二九四〇円）

## 本の紹介

松沢哲成著

## 『天皇帝国の軌跡』

『お上』崇拜 排外 排外の近代日本史』

吉村 智博

## 論理的枠組みと論旨 序論

人間社会の現代的探求に際して、主体相互の歴史認識に深く関係する四重の意味での「現在」(H・ハイペル)を見定めようとする自覚は、アジア・太平洋戦争における日本の敗戦をめぐる節目(三〇周年や五〇周年という十進法的区分)に、とりわけ歴史学研究者のあいだで高揚するが、直近の節目といえ、二〇〇五年前後の時期にあつたように思う。敗戦六〇周年を記念して刊行された『岩波講座 アジア・太平洋戦争』(全八巻、二〇〇五、〇六年)を通覧していると、人口政策、厚生行政など古典的テーマを最新の研究水準から究明した論議だけではなく、ジェンダー、戦争観、身体などポストモダンの影響を多分に受けていると見受けられる分

析視角を採用した論議などが配置されている。そこからは、総力戦にいたる因子と人間を結合する多様な媒介項、諸階層の主體的営為をめぐる構造的矛盾、抵抗を伴いながらも総動員体制へと回収されていく民衆思想の陥穽などを通して、アジア・太平洋戦争の実像が多面的に照射されている。とりわけ、近代市民社会をながく規定している労働力再編や労資関係をめぐる問題として、第2巻(戦争の政治学)所収の加瀬和俊「戦時経済と労働者・農民」が、日雇労働者への需要増加の原因とその供給源、日雇労働者の賃金・移動の統制について論じたことは、一九七〇、八〇年代にかけての総力戦にかかわる歴史学研究において日雇労働者をめぐる研究が成果を共有化してこなかったことを回顧すれば( )、非常に有意義なことであった。た

だ、総力戦体制下の日雇労働者の処遇や立場、思想について、彼/彼女らの日常的営為にそくしてより深く理解したいという知的欲求は、評者のような市井の一読者のなかでより膨らんでいくのである。この岩波講座が完結した直後に刊行された本書は、そうした一読者の欲求に見事に応答し、さらなる研究の進展を期する研究者を問題解明の糸口まで導いてくれる。同書は、松沢哲成(敬称略、以下同じ)が一九八五年から二〇〇三年にかけて執筆した、日本帝国主義と寄せ場、日雇労働者をめぐる労務政策にかかわる一〇編の論文を三章に再構成し、付録を二編付した、近代日本の労務政策にかかわる集大成ともいえる作品である。一九九〇年代以降、松沢が精力的に展開してきた近代天皇制国家批判と総力戦下の中国人強制連行の丹念な掘り起こし、主に日本寄せ場学会(年報『寄せ場』を刊行)を中心に進めてきた日雇労働者をめぐる構造的な問題の緻密な実証研究が配列されている。

分析しているからであり、統治機構の絶対性とコロニアリズムの正当化の上になつた日雇労働力市場の合理化と労働力(労働手段)搾取のメカニズムを解明しているからに他ならない。問題解明のための視座を凝縮して明記しているのは、冒頭の「序論 われわれの視座」にある「日本はその過去の歴史上、国の内外において恥ずべきこと、痛ましいこと、等々を実際に他に對し、自国の多数の被支配者に對し、実施してきたという、けつして消すことのできない厳然たる事実」があるのだから「事実を事実として受け止めるのが正しい」(一頁)との一文であり、それは本書全体にも通底する問題関心である。

たとえば、以下にあげる総力戦体制下の民衆生活・社会生活史研究では、日雇労働者については具体的に言及されてこなかった。秋元律郎『戦争と民衆』(学陽書房、一九七四年)、粟屋憲太郎「戦時下の民衆」(藤原彰編『日本民衆の歴史・九(戦争と民衆)』三省堂、一九七五年)、同、国民動員と抵抗」(『岩波講座 日本歴史・二(近代八)』岩波書店、一九七七年)、塩田咲子「戦時統制経済下の中小商工業者」(中村政則編『体系・日本現代

史・四（戦争と国家独占資本主義）』日本評論社、一九七九年）、赤澤史朗「太平洋戦争下の社会」（藤原彰編『十五年戦争史・三（太平洋戦争）』青木書店、一九八九年）。

### 帝国日本の形成過程 第 章

絶対主義的な近代国家の建設過程を一八世紀中葉にみる松沢はまず、第 章第1節で、身分制社会動揺期の工藤平助、林子平、本多利明らの富強論、国防（海防）論、経世論などに近代帝国主義の原初を見出す。そして、第 章第2節で、幕府の無宿人対策や人足寄場制度（小石川）導入などを検討して、それらを「寄場 全国網」の形成と位置づける。この二つの短い文章は序論を受けた本論への架橋である。明治維新以後の民権活動家（左派・右派いずれも）らの国家論や対外観、大日本帝国憲法の立案作業をめぐる国権論の台頭とその国家観、あるいは帝国憲法制定後の国民国家論など多様な思想的回路と、町方や東京府による地域社会あるいは無宿人・賤民（非人身分）への具体的対策にも触れて欲しかったが、概して、松沢の近代国家理解が端的に提示されており、

本論への導入となる。

第 章第1節は、帝国国家の枠組みの検討からはじまるが、その制度的契機として戸籍編纂を第一に重視する。この編纂過程から明らかとなった論点として、為政者による「人民の保護」の保障、均質化された風習による規律の生成、周縁部分を「下」とする価値序列の創造、上記の基準から外れた者への徹底した除外、の四つを列挙している。そして具体的には、に対応する規範として、違式誣違条例を、の周縁化を實行する法令として娼妓・芸妓廃止令を、そして、については脱籍者、刑余者、病者などをふくめた日傭労働者への一連の対策をそれぞれ定義する。このことが地政学的に木賃宿、遊郭、避病院、監獄などを「醜態」とする尺度を創出して注視と監視の国家を構築していくのだと論じている。

### 帝国日本と労務統制の実態 第 章

ここまで紹介した松沢の叙述方法は、論理枠組み優先であったが、第 章第2節からは、寄せ場での日傭労働者の個々の処遇へと展開し、主として一九二〇年代の東京

を舞台とした労務統制の具体的な論証へと論点が移行する。「ある社会体制の矛盾は、その底辺・下層部分に凝縮されてあらわされる」という。戦前日本帝国主義の本質である、差別、排外、抑圧、搾取といった性質もまた、国内においては、その底辺・下層「社会」に集約されて発現した」（六一頁）ことを、一つには就労の仕組みから、二つには労働者の手配の点から解明している。前者の場合は、各都市の周旋屋による「監獄部屋」「タコ部屋」への斡旋、労働下宿・人夫部屋などを經由する親方制度、公設職業紹介所からの斡旋、寄せ場での手配師による斡旋などがあげられる。また、後者の場合は、

右翼（の業者化）や土木請負業者（の政治右翼化）などによる斡旋方法（大日本国粋会など）があげられている。こうした就労斡旋構造の本質は、「資本と景気が労働力を大量に必要とするとき労働者は就労でき、必要としないときアプれる（失業）、そのような労働力市場が出来上っていたこと、一言でいえば底辺・下層労働者たちはいわゆる単純不熟練労働力の供給源であり、景気の調整弁たる役割を担っていたということこそが、問題の

焦点」（八七〜八八頁）なのだと明快に述べた。

続く第3節では一九三〇年代の「非本工」の労働実態が焦点化される。冒頭には鉄道工事を請け負っていた鹿島組（現・鹿島建設）、間組、大倉土木（現・大成建設）の植民地および統治領での鉄道建設工事を概観し、それらの工事に従事する労働者は、常雇本工、臨時雇職工、人夫（人足）の三層構造に区分されていたことを指摘する。また、常雇工よりも臨時工が多く占める工場の一覧を掲げ、「総じて、日本の資本主義的帝国主義にとって、各種の非本工労働者は必須不可欠な存在であった」（一〇五頁）と結論づけた。さらに、就労過程も登録労働者、部屋人夫、その他に分類されており、下請けの重層化と同業者間での労働者のたらい回しによる頭刎（ピンハネ）が行っていることも説明する。とくに、「監獄部屋」と呼称された労働下宿や飯場の場合、業者「発注元と日傭労働者との間に介在していた親方にも、労働力供給方法によって三類型あることが指摘される。人夫の供給のみを請け負う親方、親方 工事の下請け 労働下宿または飯場 作業監督 人

夫、官庁や民間発注元 労働者供給元請け 会社の労働係たる親方 公認部屋 下部屋 人夫(部屋人夫・寄せ場労働者)がそれである。の場合は頭数を揃えるための「幽霊人夫」などの問題が発生し、では人夫部屋間で階層差がみられたりするという。

そして、第4節は、中国人、朝鮮人、アイヌ民族、ウチナンチュ、琉球弧出身者、台湾先住民族などに対して植民地支配ないしは内国植民地化を合理化し、なおかつ一九四〇年代の労務統制・管理に一元化していった過程が概観されている。

#### 帝国日本の膨張と矛盾 第 章

内務省関係史料を駆使して、前章までに明確にされた帝国日本の労働力編成の具体像と労務統制の諸相は、一九四〇年代の近衛新体制のもとにおける労務政策へと帰結する。松沢は、この時期の政策を特徴づけている帝国日本の本質を戦時寡頭体制(オリガキー)と多重的多層的支配(ピラミッド)に見出すが、前者を総力戦遂行のための少数による政治的・社会的・産業的権限の強化と位置づけ、後

者を階層序列に準拠した多層間の相互搾取と抑圧であると把握した。第1節では、前者が解明の対象であるが、その形成過程を一九四〇年以降毎年実施される労働員実施計画書の作成、国民労働手帳制度の導入(四一年一〇月)、経済統制会の結成などに見出した。そのうえで、この時期の労務政策の根本的なねらいが、「遊休労働」の根こそぎ動員、労働力移動の防止、産業再編成に伴う重点主義的労働配置の二点にあったとし、この労働政策そのものは「日本全体が巨大なタコ部屋で、労働者を極限的にこき使おうという態勢」(一七六頁)の顕現に他ならないと確定した。とくに、アジア諸国の人々への強制連行という視点からみて、とくに軍・官・民が一体となつて遂行した政策でもあった、と指摘したことは重要である。帝国日本の労務統制は詰まるところ「労働者の自由を極端に規制し、食事や衣服もろくに与えないまま酷使する昂進的暴力性、ならびに上下に幾重にも連なる支配の重層性」とよつて特徴づけられる「(一九三頁)のである。

第2節は、大阪の釜ヶ崎、名古屋の笹島、横浜の寿町と並んで

「四大寄せ場」のひとつに数え上げられる東京の山谷での暴力的支配と労務管理の実像を詳細に解説している。ここでは第 章で検討された「非本工」と植民地支配のもとで朝鮮人たちがいかなる方法で労務政策の犠牲となつたかが明確に論じられている。これに続く二つの節は本書の一貫した視座を再確認するように「帝国の膨張」と題して、第3節では専ら労働員の歴史的経緯が近代社会にまでさかのぼつて確認され、動員政策の本質が歴史的に追求されている。また、第4節では、中国人強制連行の際の支配様式が日本人労働者へのそれをモジュールとして適用していたこと、さらに「大東亜共栄圏」構想のもとでの国策研究会の展開した「南方労働問題」論などの検討をおこなう。

「基底部たる役割」を担わされてきた日本人日傭労働者、日本へ強制連行されてきた多くの東アジア諸民族の労働および生活実態を詳細に分析して松沢が全面展開してきた帝国日本の搾取・排外・抑圧の労務政策史の論点と要旨を整理する作業は、ここでひとまず終える。最後に、松沢の提示した総力戦体制下の労働員研究の意義と

そこから、多くの研究者が共有でき、かつ実証研究を深化させうる論点とをみておきたい。

#### 近代「寄せ場」史の総論的把握に向けて

第一に、総力戦体制における日傭労働者の労働力編成過程の具体像を植民地支配や内国植民地化のロジックをも射程に入れて明示したことが、本書の意義として最も重要な点である。

冒頭でも若干補足したように、今日の歴史学会では日傭労働者を取り巻く諸問題は、ほとんど考察の対象とはなつておらず、都市下層社会の構成要素のパートとしての位置を与えられるか、あるいは労働者問題全般に理論的に回収されてしまいがちである。日傭労働者の生活拠点や日常的営為の本源である寄せ場自体が歴史学研究の対象とはなり得ていないのである。人文地理学や社会学などにおいては寄せ場への問題関心が従来からも高く、戦前・戦後を通じた研究も豊富であるにもかかわらず、歴史学では、下層社会の一部としての位置づけにとどまっている感が強い。近代の都市構造を社会的排除という視座から照射する試みと

して近年、「四大寄せ場」の一つである大阪の釜ヶ崎（大阪市西成区、行政用語で呼称するところの「あいりん地区（地域）」）にかかわる、近年の評者の研究などはいまだ事実関係の叙述をおこなったにすぎない。

それはさておき、労働力編成の問題は、日傭労働者（松沢の詳細な分析対象としては日本人のみならず、東アジア諸国の諸民族であり、かつ「非本工」である人々）たる彼／彼女らが日常的な生活を営む都市共同体そのものを規定する要件である。熟練の本工をはじめとする常雇労働者が戦線へと動員されることによって、彼らの不足分を補填するのが日傭労働者であるからに他ならない。このことは、東京に限定されることではなく、他の都市圏、とくに一九四〇年代以降一〇万人を超越する人口吸収力をもっていた諸都市、そして三二五万人と膨張した大阪にも該当する事実であった。

きわめて推測的な言い回しになるが、松沢が論証した総力戦体制下の動員を積極的に支持した官・産・学・民による融合のシステムは、おそらくいずれの都市においても機能していたものと考えられる。

る。

第二に、上記のような点で、都市下層社会史の研究課題として、日傭労働者問題を積極的に位置づける端緒を切り開いた点である。

たしかに、従来の都市下層社会史では、一九二〇～三〇年代にかけての都市下層の家族構成や就労実態などの生活構造を解明する業績が著しい成果を上げている（）。しかし、港湾労働（沖仲仕など）や再生資源回収業（「バタヤ」など）の不安定就労については言及されているが、「寄せ場」そのものを対象にして労働者の生活実態を、その前後の時期つまり一九四〇年代を含めて明確にした研究は乏しい。本書によって、なかば空白期ともいえる研究領域にあらたな知見が加えられたことの意義もまた大きい。

第三に、アジア・太平洋戦争期さらには十五年戦争期の研究課題として、日傭労働者問題を積極的に位置づける役割を果たした点である。

この点は、労働力および共同体秩序の再編成の問題とも関連するが、この研究領域には、すでに生産力を推進する自発的な「目的合理性」を有した主体とその労働倫

理を見出した大塚久雄「生産力と経済倫理」「最高度「自発性」の発揚」ほか経済倫理（エートス）にかかわる論攷（『大塚久雄著作集八』一九六九年）などがある。また、山之内靖らの社会システム論が捉えた強制的均質化という視角をその実態も加味して、性差・知能・健康・民族優生などをめぐる「新たな差別」を合理化するという視点から意義づけ直した西成田豊による「都市下層労働市場」論の提起と総力戦体制下での労働力再編成をめぐる実証的研究（『近代日本労働史』二〇〇七年）などが近年では上梓されている。

さらに、共同体秩序についての議論を前提とすると、日傭労働者自身のみならず、家族（とくに子弟）など共同体総体を対象とした分析へと新たな研究視角を切り拓く。とくに都市共同体の結合様式（ゲゼルシャフト）の一形態である町内会の歴史的意義についても、豊富な実証研究があり（）、これら研究成果との接合の必要性にも視野を広げてくれたのである。

代表的な成果は、玉井金五編『大正・大阪・スラム』（新評論、一九八六年）、布川弘『神戸における都

市「下層社会」の形成と構造』（兵庫部落問題研究所、一九九三年）、中川清『日本の都市下層』（勁草書房、一九八五年）、同『日本都市の生活変動』（勁草書房、二〇〇〇年）など。

たとえば、玉野和志『近代日本の都市化と町内会の成立』（行人社、一九九三年）、岩崎信彦編『町内会の研究』（御茶の水書房、一九八九年）、三輪泰史解説『戦時下の民衆生活』（大阪市史編纂所、一九八九年）など。

以上、評者の問題関心に即して、本書の論点などを提示してきたが、評者の力量不足や思いこみなどによって、本書において提示されている総力戦体制における問題群の総体を把握できたとはいえない。それどころか多くの誤読によって不要な議論を展開してしまったのではないかと懼れている。筆者の松沢哲成氏、また読者諸賢のご海容を乞う次第である。

（れんが書房新社、二〇〇六年二月、二、八〇〇円＋税）

## 特集 社会的セーフティネットを考える

## 本の紹介

『よみがえった黒べえ』(木下川解放子ども会文, 渡辺つむぎ絵) / 『在日の恋人』(高嶺格著) / 『人権のまちをゆく』(全国同和教育研究協議会編) / 『発達障害のある子どものきょうだいたち 大人へのステップと支援』(吉川かおり著) / 『障害者はどう生きてきたか 戦前戦後障害者運動史』(杉本章著) / 『DVD ちゃんと生きて受けとめて』(SSHP全国ネットワーク制作・著作) 歴史を直視してこそ責任をはたしえる 朝治武著 『アジア・太平洋戦争と全国水平社』 笠松明広

部落文化を訪ねて 9 近世身分制度と朝鮮侵略・キリシタン禁止 川元祥一

部落・差別の歴史 そのとらえ直しと論点 13 第2章 長吏・かわたの仕事と役割をめぐって 8 医薬業、竹箴作りなどとの関係 藤沢靖介

部落解放 612号(解放出版社刊, 2009.4): 630円

## 特集 五月病をこじらせる! 働き方を考える

## 本の紹介

『太郎が恋をする頃までには...』(栗原美和子著) / 『良い支援? 知的障害/自閉の人たちの自立生活と支援』(寺本晃久[ほか]著) / 『街場の教育論』(内田樹著) / 『ネイティブ・アメリカン 先住民社会の現在』(鎌田遵著) / 『障害者の権利と法的諸問題 障害者自立支援法を中心に』(九州弁護士会連合会・大分県弁護士会編) / 『唄い継ぐところ 私の中の「竹田の子守唄」』(改進黨支部情宣部編)

日本でマイノリティー出身の首相は可能か? 1月16日付 ニューヨークタイムズの記事を読んで 朴育美

年越し派遣村から見えるもの 豊田直巳

私が字が書けんことを、みんな、全然知らなかった。口がたちよるもんじゃけえ。語り 井上ハツミ

未来を紡ぐ大地から 交流18年の軌跡 南インド・タミルナドゥのダリット村開発プロジェクトについて 安田耕一

部落・差別の歴史 そのとらえ直しと論点 14 第2章 長吏・かわたの仕事と役割をめぐって 9 芸能と長吏・かわた、非人などの関係 藤沢靖介

部落解放研究 184(部落解放・人権研究所刊, 2009.1): 1,000円

## 特集 人権学習における「参加型」再考

「人権教育のための世界プログラム」と「人権教育・啓発推進法」を活用した取り組みの現状と課題 自治体の取り組みアンケート調査を踏まえて 友永健三

部落解放教育と学校ソーシャルワーク(S S W) 両者の接点と今後の課題を考えるために 住友剛

合衆国におけるコミュニティ・スクーリングの現状 3

ハヤシザキ カズヒコ/レイチェル・ウィンター

## 書評

辻本一英著『阿波のでこまわし』 水本正人/三浦耕吉

郎編著『屠場 みる・きく・たべる・かく 食肉センターで働く人びと』 岸衛/原田琢也著『アイデンティティと学力に関する研究 「学力大合唱の時代」に向けて 同和教育の現場から』 川口俊明/岸裕司著『学校開放下でまち育て サステイナブルタウンをめざして』 大橋保明

部落解放研究 15(広島部落解放研究所刊, 2009.1): 1,000円

戸籍謄本等不正取得事件と身元調査根絶の闘い 山下真澄

人権課題の認知状況とその規定要因に関する一考察 大崎上島町の人権意識調査から 伊藤泰郎

マックス・ウェーバーの歴史分析 部落問題研究に向けて 藤田成俊

アフター・コミュニティ?アフター・アイデンティティ?

在日朝鮮人のアイデンティフィケーションの批判的考察 文貞實

植民地沖縄におけるネオリベリズムと反抗 ヤンキー・サブカルチャーズ研究序説 打越正行

大学における人権学習履修状況調査から見えること 瀧上和俊

ライツ 117(鳥取市人権情報センター刊, 2009.2)

今月のいちおし! 『愛知における部落差別の現状』(部落解放同盟愛知県連合会作成) 坂根政代

リベラシオン 132(福岡県人権研究所刊, 2008.12): 1,000円

## 特集 人権のまちづくり

小特集 三苦鐵児先生を偲ぶ

席田・月隈の社会運動と生活 2 金山登郎

図書の紹介 『対論 部落問題』(組坂繁之・高山文彦著) 竹森健二郎

リベラシオン 133(福岡県人権研究所刊, 2009.3): 1,000円

## 隣保館と福祉

これからの隣保館の役割 原田悟志/隣保館の相談事業とソーシャルワーク 隣保館活動とソーシャル・ケースワーク導入の意味 富島喜揮

## 人権教育

「第1次とりまとめ」審議過程からみえる人権教育観 板山勝樹/人権学習の実際と今日的課題 教育現場の現実と悩みと、更なる広がり求めて うんのまなぶ/「引き揚げ港・博多」授業化の試み 聖福寮の子ども(戦災孤児)と二日市保養所(墮胎病院)の命 そのだひさこ 部落が語りかけるとき 岩田芳之さん 聞き書き 加藤陽一

席田・月隈の社会運動と生活 3 金山登郎

育と文学の授業の結合 東上高志

「人権教育」批判 「人権教育」を克服するために 谷口幸男

ねっとわーく京都 240 (ねっとわーく京都21刊, 2009.1) : 500円

同和奨学金免除条例は、市長責任免除条例だ！ 井関佳法

同和レポート 2 「地元協力金」ってなんだ!? 公共工事にまつわる金の話 寺園敦史

ねっとわーく京都 241 (ねっとわーく京都21刊, 2009.2) : 500円

ウォッチャーレポート 56 「公益性」の壁 部落解放センター敷地ただ貸し事件判決について 寺園敦史

ヒューマンJournal 187号 (自由同和会中央本部刊, 2008.12) : 500円

融和運動の再評価 3話 任侠と水平運動 増田伊三郎のこと 宮崎学

ヒューマンJournal 188号 (自由同和会中央本部刊, 2009.3) : 500円

京都市同和行政終結後の行政の在り方総点検委員会 報告書

融和運動の再評価 4話 任侠と水平運動 今田丑松のこと 宮崎学

ヒューマンライツ 250 (部落解放・人権研究所刊, 2009.1) : 525円

座談会 フェミニズム教育学をめざして

市民がメディアになるとき 10 情報の谷間に落ちこまないために 「目で聴くテレビ」(大阪) 小山帥人

シリーズ いっしょに動こう、語りあおう 14 子ども会の再建にこめた願い 生江地区「なぎさ会」の取り組みから 住友剛

書評 森田ゆり著『子どもへの性的虐待』 野坂祐子  
ヒューマンライツ 251 (部落解放・人権研究所刊, 2009.2) : 525円

部落解放・人権研究所40年の歩み 5 30年の活動と新たな飛躍を目指し名称を変更 友永健三

書評 『非営利放送とは何か 市民が創るメディア』(松浦さと子, 小山帥人編) 西村秀樹

ヒューマンライツ 252 (部落解放・人権研究所刊, 2009.3) : 525円

排除される若者たち 西田芳正

子ども施策に対する地方自治体行政の責任 大阪府内での青少年会館存続に関する議論のあり方をめぐって 住友剛

部落解放・人権研究所40年の歩み 6 国連・人権小委、人種差別撤廃委、ダーバン会議等への働きかけ 友永健三

走りながら考える 95 差別の連鎖を作り出す教育格差教育を媒介して貧困層が固定化 北口未広

ひょうご部落解放 131 (ひょうご部落解放・人権研究

所刊, 2008.12) : 700円

部落解放研究第29回兵庫県集會報告書

部落解放 607号 (解放出版社刊, 2009.1) : 630円

特集 格差と闘う福祉 福祉観の転換を本の紹介

『障害者の権利条約と日本 概要と展望』(長瀬修・東俊裕・川島聡編) 松波めぐみ/健康幻想の社会学(八木晃介著)/『えん罪志布志事件 つくられる自白』

(日本弁護士連合会編)/『貧民の帝都』(塩見鮮一郎著)/『世界一の障害者ライフサポーター』(木村志義著)/『アイヌ民族の視点からみた『先住民族の権利に関する国際連合宣言』の解説と利用法』(上村英明著)

/『筑紫れくいえむ』(坂井美彦, 坂井ひろ子著) 学校部活動の性暴力を生み出す土壌 あるスクールセクハラ裁判から考える 亀井明子

プライバシー侵害と差別への利用 グーグル・ストリートビューの人権上の問題性 北口学

対談 穢れと差別 上 上杉聰、山本幸司

梵鐘が結んだ無実の死刑囚と「らい者」 西武雄とわたしの父 林力

山本政夫と融和運動史研究の現状 『山本政夫著作集』の発刊に寄せて 本郷浩二

全国チョンガレまつり 珠洲 下 新しい民衆の伝統が始まる 川元祥一

部落解放 608号 (解放出版社刊, 2009.1) : 1,050円

第39回部落解放・人権夏期講座報告書

部落解放 609号 (解放出版社刊, 2009.2) : 630円

特集 大学の人権教育

教育改革と“新たな”融和主義の蜜月 同和教育・人権教育と大学の使命とは 阿久澤麻理子/教員系大学における人権教育実践の可能性 国立ハンセン病資料館との連携の試み 君塚仁彦/法学教育における人権教育 法曹養成教育の視点から 大谷美紀子/インタビュー 常識を疑うということ 当事者の視点で考える人権教育 姜博久/対談 情報発信、政策提言のできる体制づくり 全国大学同教25年の歩みのなかで 加藤昌彦, 石元清英

本の紹介

『「母」たちの戦争と平和』(源淳子著) 豊田真穂/『宇宙をかけて 市川正昭・人権教育の軌跡』(市川正昭先生遺稿集編纂委員会編)/『生きる 大阪拘置所・死刑囚房から』(河村啓三著)/『サンカと犯罪』(筒井功著)

なぜ米国は黒人大統領を選んだか オバマの選挙戦と今後 神林毅彦

野宿者襲撃をなくすために 「ホームレス問題の授業づくり全国ネット」始動 生田武志

対談 穢れと差別 下 上杉聰, 山本幸司

部落解放 610号 (解放出版社刊, 2009.2) : 1,050円

部落解放研究第42回全国集會報告書

部落解放 611号 (解放出版社刊, 2009.3) : 630円



630円

特集 先住民の権利宣言

文芸の散歩道 近世文芸に著された賤民 『翁草』より  
小原亨「解同」裁判40年 到達点と課題 13 同和特別措置法  
失効後の事件と同和行政完全終結への展望 下 大阪府下  
の諸事件と終結への展望 石川元也人権と部落問題 783 (部落問題研究所刊, 2009.2) :  
630円

特集 なお残る同和教育の「負の遺産」

埼玉の「負の遺産」を考える 費田教秋 / 今なお続く京  
都市の同和教育 新谷一男 / 同和の負の遺産は「新しい  
差別」をつくる 和歌山県の教育問題を中心にして  
竹田政信 / 高知県内の同和教育の「負の遺産」 永野健  
一本棚 岩井忠熊著『「靖国」と日本の戦争』 畦地享平  
文芸の散歩道 岩本無縫編の発禁詩集『俗體詩』と藤村  
操にまつわる発禁「偽書」 桑原律「解同」裁判40年 到達点と課題 14 同和行政の完全  
終結を実現するために基本的理論の再確認と具体的な取  
り組み 石川元也人権と部落問題 784 (部落問題研究所刊, 2009.2) :  
1,155円

特集 現代の貧困と生きる権利

人権と部落問題 785 (部落問題研究所刊, 2009.3) :  
630円

特集 講座「住民自治と同和行政の終結」

住民自治を発展させるために同和行政を終結させよう  
成澤榮壽 / 同和行政継続の根拠を問う 石倉康次 / 京都  
市における職員不祥事問題と「同和」行政の実態 中村  
和雄 / 環境整備と新たなまちづくり 東大阪市のとりく  
み 古川康彦文芸の散歩道 発見! 和田夏十脚本 TVドラマ『破戒』  
秦重雄「解同」裁判40年 到達点と課題 連載を終えるにあたっ  
て 同和問題の40年の時代的流れ 国連人権規約委員会の  
求める国内人権機関についての論議を 石川元也月刊スティグマ 151号 (千葉県人権啓発センター刊,  
2008.12) : 500円

特集 「格差論」について

新たに増殖する「格差」という「差別」 鎌田行平  
橘史学 23号 (京都橘大学歴史文化学会刊, 2008.11)  
19世紀南部プランテーション奴隷コミュニティにおける  
女性たち 松江亜矢地域と人権 1072号 (全国地域人権運動総連合刊, 200  
9.1.15) : 150円

特集 「同和地区」問い合わせの波紋

歴史の歯車は止められない 「太郎」とかかわって  
(下) 丹波真理

地域と人権 1074号 (全国地域人権運動総連合刊, 200

9.3.15) : 150円

「太郎」とかかわって (続編) 鼻につく心境小説に憤  
り 「差別深刻」は現実乖離 鐘井秀子月刊地域と人権 300 (全国地域人権運動総連合刊, 20  
09.2) : 350円

月刊誌300号を迎えて 中島純男

資料 「解放の道」理論・政策・資料版目次 上 (創刊号  
~100号)

ちくま 453 (筑摩書房刊, 2008.12) : 100円

農村青年社事件 5 女性アナキストの像 その2 保阪正康  
青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 19 第5章 高橋貞樹  
との邂逅 1 沖浦和光

ちくま 454 (筑摩書房刊, 2009.1) : 100円

青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 20 第5章 高橋貞樹  
との邂逅 2 沖浦和光

ちくま 455 (筑摩書房刊, 2009.2) : 100円

青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 21 第5章 高橋貞樹  
との邂逅 3 沖浦和光

ちくま 456 (筑摩書房刊, 2009.3) : 100円

青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 22 第5章 高橋貞樹  
との邂逅 4 沖浦和光であい 562 (全国同和教育研究協議会編, 2009.1) : 1  
50円人権文化を拓く 139 同和教育がめざしてきたものを大  
切にして 富田稔であい 563 (全国同和教育研究協議会編, 2009.2) : 1  
50円人権文化を拓く 140 インターネットと人権~最近の事  
例から~ 松村元樹であい 564 (全国同和教育研究協議会編, 2009.3) : 1  
50円

人権のまちをゆく 45 五郎兵衛さんの新田開発

人権文化を拓く 141 北九州の生活保護行政とNPO活動に  
ついて 南川健一どの子ども伸びる 399 (部落問題研究所刊, 2009.1) :  
735円「人権教育」批判 人権学習事例集『心にいつもきれいな  
花を』の問題点 1 谷口幸男どの子ども伸びる 400 (部落問題研究所刊, 2009.2) :  
735円「人権教育」批判 人権学習事例集『心にいつもきれいな  
花を』の問題点 2 谷口幸男どの子ども伸びる 401 (部落問題研究所刊, 2009.3) :  
735円「人権教育」批判 兵庫県における人権教育とその問題  
点 谷口幸男どの子ども伸びる 402 (どの子ども伸びる研究会刊, 2009.  
4) : 735円

特集 どの子ども伸びる研究会の歩みと研究成果 1

「どの子研」を生んだ教育実践 上 生活綴方と集団の教

- 信州の近世部落の人びと 43 一把稲と旦那場 15 斎藤洋一  
同和問題再考 96 同企連は「風化」の一途 田村正男  
部落差別の現実 77 人権・同和教育の現場 1 江嶋修作  
語る・かたる・トーク 167 (横浜国際人権センター刊,  
2009.1) : 500円  
わたしと部落とハンセン病 38 林力  
信州の近世部落の人びと 44 一把稲と旦那場 16 斎藤洋一  
同和問題再考 97 宗教の差別、悪いのは誰か 田村正男  
部落差別の現実 78 人権・同和教育の現場 2 江嶋修作  
語る・かたる・トーク 168 (横浜国際人権センター刊,  
2009.2) : 500円  
わたしと部落とハンセン病 39 林力  
信州の近世部落の人びと 45 一把稲と旦那場 17 斎藤洋一  
同和問題再考 98 信頼できない宗教者も 田村正男  
部落差別の現実 79 人権・同和教育の現場 3 江嶋修作  
語る・かたる・トーク 169 (横浜国際人権センター刊,  
2009.3) : 500円  
わたしと部落とハンセン病 40 林力  
信州の近世部落の人びと 46 一把稲と旦那場 18 斎藤洋一  
同和問題再考 99 部落の寺を「穢寺」と差別 田村正男  
部落差別の現実 80 人権・同和教育の現場 江嶋修作  
かわとはきもの 146 (東京都立皮革技術センター台東  
支所刊, 2008.12)  
靴の歴史散歩 91 稲川寛  
正倉院と皮革 11 正倉院宝物に見る皮革の利用と技術 1  
皮革の特性を熟知・活用 出口公長  
皮革関連統計資料  
K G人権ブックレット 12 (関西学院大学人権教育研  
究室刊, 2008.12)  
窪塚洋介と平成ネオ・ナショナリズム スピリチュアル・  
ブームと愛国心のゆくえ 中島岳志  
関西大学人権問題研究室紀要 56号 (関西大学人権問  
題研究室刊, 2008.6)  
特集 国際シンポジウム 歴史認識と歴史教育 歴史教科  
書をめぐる議論とドイツ・ポーランド接近の道  
紀州経済史文化史研究所紀要 29号 (和歌山大学紀州  
経済史文化史研究所刊, 2008.12)  
紀州藩牢番頭仲間の町廻りと内証御用 藤本清二郎  
季節よめぐれ 241 (京都解放教育研究会刊, 2009.1)  
中国帰国生徒のひとりとして 藤田陽子  
排除を内包する<国民>の陥穽 大会宣言とは何である  
のか 金井英樹  
季節よめぐれ 242 (京都解放教育研究会刊, 2009.2)  
公立学校ができること、すべきこと 小林光彦  
季節よめぐれ 243 (京都解放教育研究会刊, 2009.3)  
部落史がかわった 上杉聡  
季節よめぐれ 244 (京都解放教育研究会刊, 2009.4)  
「教育改革」を鳥瞰する この10年を振り返って 外  
川正明  
京都市政史編さん通信 33 (京都市市政史編さん委員  
会刊, 2009.1)  
戦後初期における京都市失業対策事業と失対労働者に関  
する覚書 (上) 杉本弘幸  
京都文教短期大学研究紀要 47集 (京都文教短期大学  
刊, 2009.3)  
資料 糸賀一雄蔵書目録 (哲学編) 石野美也子  
月刊きょうの論談 70 (論談社刊, 2009.1) : 500円  
京都に生きて、京都を愛して 73 同和行政の歪み 梶宏  
キリスト教社会問題研究 57 (同志社大学人文科学研  
究所刊, 2008.12)  
「満州」における「からゆき」救済事業 益富政助と満  
州婦人救済会をめぐって 2 倉橋克人  
田中さんの若き日の思い出 秋定嘉和  
グローブ 56 (世界人権問題研究センター刊, 2009.1)  
死刑のある国に生まれて 阪本仁  
フィールドにすむ/すまうこと 杉本弘幸  
複合差別から解放のプロセスを被差別部落女性のライフ  
ヒストリーから考えたい 熊本理抄  
人権の“館” 信州農村開発史研究所 五郎兵衛記念館  
国際人権ひろば 84 (アジア・太平洋人権情報センター  
刊, 2009.3) : 350円  
特集 国際シンポジウム「多文化家族と地域社会 日本・  
韓国・台湾における共生を考える」~東アジアでの国際  
結婚による女性の移住者の問題を中心に  
こべる 190 (こべる刊行会刊, 2009.1) : 300円  
ひろば 120 裁判員制の狙いは何か 梅沢利彦  
部落のいまを考える 107 市民自治への道 福井県丹南  
地域の取り組みに学ぶ 香川明英  
いのちを生きる 16 「ひろしま」への旅 長谷川洋子  
光る風を見た 写真と文 小林茂  
こべる 191 (こべる刊行会刊, 2009.2) : 300円  
ひろば121 世の中には男と女しかいないのか? 田中良  
地域で人と行き合う 1 生活支援の仕事にかかわって思  
うこと 吉田朱美  
いのちを生きる 17 めざせ、一キロ六分半 長谷川洋子  
映画の現場 写真と文 小林茂  
こべる 192 (こべる刊行会, 2009.3) : 300円  
大沢敏郎さんを受け継ぐ 1~3  
続く道 吉田浩司/一本の道を歩む 石川千幸/識字学校  
との出会い 竹村早織  
映画の現場 写真と文 小林茂  
狭山差別裁判 404号 (部落解放同盟中央本部中央狭山  
闘争本部刊, 2007.8) : 300円  
狭山事件と野間宏 6 庭山英雄  
狭山差別裁判 405号 (部落解放同盟中央本部中央狭山  
闘争本部刊, 2007.9) : 300円  
狭山事件と野間宏 7 庭山英雄  
試行社通信 267号 (八木晃介刊, 2009.1)  
私が<少数者>に  
人権と部落問題 782 (部落問題研究所刊, 2009.1) :

今週の1冊 『エネルギーと環境の話をしよう』（西尾漠著）

解放新聞 2401号（解放新聞社刊，2009.1.5）：160円

対談 組坂繁之・上田正昭

インタビュー 湯浅誠さん

本の紹介

『アメリカの黒人演説集 キング・マルコムX・モリスン他』（荒このみ編訳）／『カムイ伝講義』（田中優子著）／『アジア・太平洋戦争と全国水平社』（朝治武著）

解放新聞 2402号（解放新聞社刊，2009.1.12）：80円

対談 組坂繁之・上田正昭

今週の1冊 『日系人の歴史を知ろう』（高橋幸春著）

解放新聞 2403号（解放新聞社刊，2009.1.19）：80円

解放の文学 33 戦場をどう受け止めるか 辻井喬と『終わりからの旅』 音谷健郎

今週の1冊 『子どもの貧困 日本の不公平を考える』（阿部彩著）

解放新聞 2404号（解放新聞社刊，2009.1.26）：80円

多様な教育を求めて 不登校から学ぶ シューレ大学とは 朝倉景樹

山口公博が読む今月の本

『セックスの哀しみ』（バリー・ユアグロー著）／『江戸の大衆芸能 歌舞伎・見世物・落語』（川添裕著）／『彰考書院版共産党宣言』（マルクス、エンゲルス著）

解放新聞 2405号（解放新聞社刊，2009.2.2）：120円

2009年度一般運動方針（第1次草案）

解放新聞 2406号（解放新聞社刊，2009.2.9）：80円

今週の1冊 『子どもが育つ条件 家族心理学から考える』（柏木恵子著）

解放新聞 2407号（解放新聞社刊，2009.2.16）：80円

ぶらくを読む 40 首都圏の部落史研究の隆盛 湧水野亮輔

解放の文学 34 「世界市民」への視野を拓く 黄哲暎と『パリデギ』 音谷健郎

山口公博が読む今月の本

『上方演芸大全』（上方演芸資料館編）／『喜びは悲しみのあとに』（上原隆著）／『限界芸術論』（鶴見俊輔著）

解放新聞 2409号（解放新聞社刊，2009.3.2）：120円

多様な教育を求めて 不登校から学ぶ 海外のオルタナティブ教育 朝倉景樹

解放新聞 2410号（解放新聞社刊，2009.3.16）：80円

第66回全国大会特集

解放新聞 2411号（解放新聞社刊，2009.3.23）：80円

部落解放同盟規約

部落解放同盟行動指針

解放の文学 35 「明治」の新しい女を造型 森田草平と『煤煙』 音谷健郎

今週の1冊 『ルポ 労働と戦争 この国のいまと未来』

（島本慈子著）

山口公博が読む今月の本

『百鬼夜行絵巻の謎』（小松和彦著）／『ブラックホールで死んでみる』（ニール・ドグラス・タイソン著）／『東京奇譚集』（村上春樹著）

解放新聞大阪版 1771号（解放新聞社大阪支局刊，2009.3.16）：70円

支部事務所訴訟が和解 和解勧告に対する府連見解

解放新聞改進黨 380号（部落解放同盟改進黨支部刊，2008.12.20）

「京都市地域改善対策奨学金等の返還の債務の取扱いに関する条例（案）」に対する要望書

唄い継ぐところ～私の中の「竹田の子守唄」～ 5 橋本君江さん 下

解放新聞改進黨 381号（部落解放同盟改進黨支部刊，2009.1.1）

部落の当事者を無視した『総点検委』の在り方と民主主義の仮面を被った京都市の横暴を許すな！

解放新聞改進黨 382号（部落解放同盟改進黨支部刊，2009.1）

傍聴記 第11回京都市同和行政終結後の行政の在り方総点検委員会

解放新聞改進黨 383号（部落解放同盟改進黨支部刊，2009.2）

傍聴記 第12・13回京都市同和行政終結後の行政の在り方総点検委員会が行われる

第13回京都市同和行政終結後の行政の在り方総点検委員会 行政の在り方に関する関係団体等からの意見聴取 部落解放同盟京都市協議会意見書

解放新聞京都版 810号（解放新聞社京都支局刊，2009.1.20）：70円

京都市によるコミセン廃止を許すな 糾弾闘争本部を設置

解放新聞東京版 711号（解放新聞社東京支局刊，2009.3.1）：90円

人々を支えた部落文化 1 今も生活文化に生きている 川元祥一

解放新聞東京版 712号（解放新聞社東京支局刊，2009.3.15）：90円

人々を支えた部落文化 2 日本近代医学の母 川元祥一

解放新聞奈良県連版 882号（解放新聞社奈良支局刊，2009.2.25）：50円

2009年度一般活動方針案

架橋 20号（鳥取市人権情報センター刊，2009.2）

10周年企画 センター設立10周年～これまで、そしてこれから

インターネットの中の差別問題と対処法 田畑重志

語る・かたる・トーク 166（横浜国際人権センター刊，2008.12）：500円

福岡事件と父（後） 林力

# 収集逐次刊行物目次 (2009年1月～3月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

明日を拓く 73 / 解放研究 21号 (東日本部落解放研究所刊, 2008.3) : 2,100円  
 講演 近世の北奥社会と被差別集団の動向 弘前藩における「革師」をめぐる 浪川健治  
 講演 山上卓樹の足跡 自由民権・キリスト教・被差別部落 石居人也  
 近世関東における被差別部落の人々の人権と生活を守る闘い 松浦利貞  
 近世の時宗鉦打 関東における差別の諸相と研究課題 大熊哲雄  
 報告 時宗・鉦打研究会の発足 藤沢靖介  
 研究ノート カナダから水平社に届いた連帯メッセージ 部落民移民史研究のために 廣畑研二  
 資料紹介 水平社対国粋会騒擾事件判決 廣畑研二  
 跡地発 40 (大阪市立浅香人権文化センター刊, 2009.1)  
 シリーズ 十人十色の人権問題 トラウマと生きて 小林育栄  
 アファーマティブやまぐち21 7号 (アファーマティブやまぐち21刊, 2008.12) : 700円  
 部落解放史の窓 朝倉丈夫の「墓守」 部落解放史の視点から 忍克比古  
 萩市「結婚相談所」差別事件の闘い 部落解放同盟山口県連合会  
 福岡県田川郡の「荒れる中学校」取材して 鈴木美穂 県内のあいつく差別事件から 川口泰司  
 ウィングスきょうと 90号 (京都市女性協会刊, 2009.2)  
 図書情報室新刊案内  
 『「家族計画」への道 近代日本の生殖をめぐる政治』 (荻野美穂著) / 『聖母像の到来』 (若桑みどり著)  
 大阪人権博物館紀要 11号 (大阪人権博物館刊, 2009.2)

特集 博物館 / 障害者 / バリアフリー  
 博物館としょうがい者 山本哲也 / 障害者と博物館におけるバリアフリーの意義 姜博久 / 大阪人権博物館と障害者 松永真純  
 日傭労働者街「釜ヶ崎」の木賃宿 法規制と止宿人の生活実態を中心に 吉村智博  
 戦後同和行政の検証(下) 「同和対策事業特別措置法」の成立まで 小島伸豊  
 博物館と学校教育 元木健  
 大阪人権博物館の学校に対する教育支援サービス 岡田達也  
 大阪の部落史通信 43 (大阪の部落史委員会刊, 2009.1)  
 西郡村関係文書から見えるもの その特異性と普遍性について 森田康夫  
 『悲田院長吏文書』の刊行によせて 野高宏之  
 解放教育 494 (解放教育研究所編, 2009.1) : 760円  
 特集 『にんげん』をひきつぐ出逢いとひろがりと... にんげんセミナー2008報告  
 元気のもととはつながる仲間 46 守護天使をめざしてドラゴンスタイルで伝えていきたい 外川正明  
 解放教育 495 (解放教育研究所編, 2009.2) : 760円  
 特集 子どもと暴力 暴力からの回復  
 元気のもととはつながる仲間 47 大切に思うからこそ議論を尽くしたい 全同教へのラブレター 外川正明  
 解放教育 496 (解放教育研究所編, 2009.3) : 760円  
 特集 人権教育の2008年をふりかえって  
 元気のもととはつながる仲間 48 (最終回) こだわり続けた30年、これからも..... 外川正明  
 解放教育 497 (解放教育研究所編, 2009.4) : 770円  
 特集 輝く学級社会を子どもと創る その方法とスキル  
 解放新聞 2400号 (解放新聞社刊, 2008.12.22) : 80円

## 事務局よりお知らせ

本年度も部落史連続講座を開催します(1頁参照)。前半期は5月・6月に「地元で学ぶ地元の歴史」として、古い歴史を持つ千本地区のコミュニティセンターで3回開催します。後半期は、11月・12月に例年通り解放センターで3回行う予定になっています。是非ご参加ください。

前年度の部落史連続講座の講演録ができました。ご希望の方は下記までご連絡ください。代金は無料ですが、送料実費のみご負担をお願いします。

所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター 3階

TEL/FAX 075-415-1032

URL <http://www.asahi-net.or.jp/~qm8m-ndmt/>

開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 10時～17時(祝日・年末年始は休みます)

交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩2分